

メッセージアウトライン

創世記 1:2 「神の霊の働き」

[2]「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた」

この2節と1節「初めに、神が天と地を創造した」の間に大きな時間的隔りがあり、そこに何十億年もの年代を入れて進化論的地質年代と調和させようとする考え（間隙説）がある。これは神に反逆したサタンの罪に対する神のさばきであり、地球を暗黒と水で覆い、あらゆる生物に死と破壊をもたらした激変の時であったという。しかし、それが事実ならば、そのような出来事について全く言及されていないのは不自然である。間隙説は地質時代の体系と調和させようとして提案されたものであるが、意図に反して調和しない。なぜなら地質時代の体系は、完全に斉一説の仮定に基づいているからである。斉一説とは自然の過程が現在に起こっている（長い時間をかけて少しずつ変わってきた）のと本質的に同じように、過去においても常に作用してきたという考えである。その結果、地質年代を受け入れている地質学者ならだれも、間隙説や地球全体に及ぶ激変があったというどのような理論も受け入れない。間隙説は科学的に自滅するのである。

また間隙説は神学的にも有害である。もし最初の人間アダムが創造される前に激変で世界が滅ぼされたと仮定するならば、その世界は、サタンが罪を犯す前に存在していたことになる。

創世記3章にあるように、サタンの誘惑によってアダムが罪を犯してこの世界に死が入って来たはずなのに→ローマ 5:12、I コリント 15:21、その時点より前に死や苦しみが存在していたことになる。このような考えを私たちは受け入れることはできない。

1節と2節は時間的に連続しており、そこに空白の年代を差し挟む余地はないのである。

「地は茫漠として何もなかった(トーフー・ワボーフー)」という表現は神のサタンに対するさばきの結果としての混沌ではなく、初めに神は天と地(空間と物質)を創造された(1)。こうして造られた物質(地球として形を整えるための構成要素である諸元素)は最初はただの元素でまだ整った形がなく何もなかった(住む者もいなかった。空虚であった)という意味である。

「やみが大水の上にあり」…神は物理的宇宙は創造されたが、それはまだ形もなくエネルギーも注がれていなかった。光はエネルギーの一つの形であるが、物理的に光がないことはやみを意味し、まだその宇宙は完成されていないことを意味する。「大水(テホーム)」も同様に水の分子として存在していたがまだ形がなかった。活動していなかった。まだこのような物質を凝集して明確な形にする重力は働いておらず、電磁力も働かず、すべては暗黒の中にあった。

「神の霊が水の上を動いていた」…「霊(ルアハ)」は「風」または「息」を意味することばであるが、ここでは神の三位一体の第三位格である「聖霊」のことと考えられる。神の創造された宇宙は茫漠とした状態から活性化される必要が

あったので、エネルギーを与えるために聖霊が働かれたのである。聖霊のこの活動は「動いていた(ラハフ)」とある。このことばは旧約聖書ではここを含めて3回だけ使われている。他の2回はそれぞれ「震える」(エレミヤ 23:9)と「舞いかける」(申命記 32:11)と訳されている。この1章2節に関しては、現代の科学的見地から見て最も良い訳は、おそらく「振動して」であろう。物質自体の構造にある核力(原子核を構成する核子[陽子と中性子]相互間に働く強い力)を除いて、実際に物質に作用している基本的力は二つだけで「重力」と「電磁気力」である。これらは活動の「場」と連動して波動によって伝達される。エネルギーはそれ自体を造りだせないで、それはどこかから与えられる必要がある。それゆえ宇宙への最初のエネルギー伝達は聖霊自体の「振動」運動によってなされたと考えることができる。そしてこのエネルギーが宇宙に広がっていくにつれて、重力は活性化され、物質の構成粒子は互いに集まって、それまでの形のない地球が水を含む球形に形づくられていったと考えることができる。またこの聖霊はイエス・キリストに対する信仰を告白させ、人を霊的に新しく生まれさせることができ、預言者たちに働いて神からのことばを語らせ、靈感された神のことば(聖書)を完成させる働きをもなされた。→ヨハネ 3:6~8, I コリント 12:3, II ペテロ 1:21, II テモテ 3:16

私たちもかつては最初の人間アダム以来の罪の闇の中を歩み、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、神の怒りを受け、永遠の滅びに行くべきものであったが、あわれみ深い神はそのような私たち人間を愛して下さり、ひとり子イエス・キリストを人としてこの世にお遣わしになり、その十字架の死による贖いによって救いの道を開いてくださった。このお方を自分の救い主として信じ受け入れる者は救われ神の子とされ、永遠のいのちを受け永遠に神と共に歩むことのできる幸いを与えられるのである。→ヨハネ 3:16, エペソ 2:1~9